

＜今日の説教のポイント 創世記 33 章 1～17 節＞

ヤコブ物語の大団円。幾つもの深い内容に驚きを覚えさせられる章。

①放蕩息子と父親の再会の場面？！

「エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いた」(4)。帰って来た放蕩息子を迎えた父親(ルカ福音書 15:20)を思い出すエサウの姿です。エサウに放蕩息子の父親、つまり聖書の神様を重ねて考えると、色々なことが見えて来ます(10 節にも注目)。

②神様に赦されたから、エサウにも赦しを乞う勇気を得たヤコブ！

「(ヤコブに) 神が恵んで下さった」(5, 11)、「(エサウから) 好意を得る」(8, 10, 15)、深い意味を持って使われている両表現です。ヤコブが前者を繰り返し語る時は、神様から赦しが得られたことを考えているのです。それ故にヤコブは勇気を出し、エサウの所に向かったのです。それは今度は兄エサウに謝り、赦しを得るためです。それをよく表しているのが繰り返し語られる二つ目の後者の表現なのです。このことをよく示しているのが 32 章 21 節です！(先週の週報③参照)

③それにしても、「長子の権」とは何だったのか？

エサウは、長子の権がなくても幸いを得られる中で、ヤコブへの憤りも消えていったのでしょうか(9)。では、一体、長子の権とは何だったのでしょうか？何かを獲得したら大丈夫、そんなことを聖書は全く述べていません。聖書が教えていることは、赦しの神様を見上げ、その神様と共に生きること、これで十分だということです。

④なお残るヤコブの不信。人間の罪の現実では、平安に満ちた別れ。

弟に会えて心から打ち解けた姿を示すエサウ。一方、なお疑い深く、エサウをだまして別れて住むことになったヤコブ。私たちはここにヤコブの問題性ばかりを見がちです。しかし、このヤコブの姿は私たち全ての罪ある人間の現実の姿です。そのことを考えると、この場面では、赦してもらえたことを確認する(「御好意だけで十分です」(15))のが精一杯であり、また、最善の「平安に満ちた別離」(ウェスターマン)であったとも言えます。神様を見上げて生きる、しかしなお罪ある人間。そんな私たちに取ることを赦された「相手との関係の距離」なのかもしれません。